

みつばちのきた日

小川未明

青空文庫

雪割草ゆきわりそうは、ぱつちりと目を開ひらいてみると、びつくりしました。かつて、見たみことも、また考かんがえたこともない、温あたたかな室しつの中なかであつたからです。そして、自分じぶんのまわりには、美うつくしいいろいろの花はなが、咲さき乱みだれていたからであります。

雪割草ゆきわりそうは、小ちいさな頭あたまの中なかで、過か去こを考かんがえずにはいられませんでした。この雪ゆきの降ふる、風かぜの烈はげしい、岩いわ蔭かげで咲さいた日ひのことが、ほんやりと浮うかびました。それは、谷たにから捲まき起おこる風かぜの叫さけびであつたか、また、山やまを越こえて、あちらの海うみからうめき起おこる波なみの音おとであつたかしのれないが、たえず、すさまじい、魂たましいを戦おのかせるよなうな響ひびきをきいて、花はな弁びらを震ふるわせながら咲さいていたのでした。

しかし、その日を不幸だとは考えなかつた。春になると、羽のうす紅い、小さなちようが、たずねてきてくれた。また、夜になると、清らかな星がじつと見守つて、いろいろ不思議な話をしてくれたからであります。

「しかし、いつたいここは、どこなんだろう。」と、雪割草は、あたりをながめて、**独語**をもらしました。

すると、すぐ、自分の頭の上に、くじやくの羽を垂れたような、**貴族的**ならんが、だらりと舌を出したように、みごとな花をつけていましたが、その言葉をききつけると、

「おまえさんのような田舎者には、ここは、ちとぜいたくすぎるよ。なところなんだよ。ここは、人間が金をかけて造つてい

る温室おんしつなのさ。わたしはここへきてから二年ねんめになるから、よくこの室しつの中なかのことは、なんでも知しっている。おまえさんだつて、山やまにいてごらんなさい。どんなに寒さむいことか。そして、まだなかなか花はなを咲さくどころでない。こうしてかわいがられたのも、早くおまえさんに花はなを咲さかして、お客きやくに売うるつもりなんだから、これから、おまえさんも、いままでのように、いいことはあるまいよ。」と、らんはいいました。

雪割草ゆきわりそうは、なるほどそういうらんのようにすを見上みあげて、美うつくしい姿すがただと、つくづく感かん心しんしました。

「それで、あなたは、どうしてここにきて、二年ねんもおいでなさるのですか？」と、雪割草ゆきわりそうは、らんに向むかって聞ききました。

らんは、さもゆつたりとした姿で、おうへいに雪割草を見下ろしながら、

「世界の植物を愛する人たちで、おそらく、わたしを知っていないものはあるまいね。わたしは、南の温かな島の林の中で育ちました。それは、いま思い出しても陽気な、おもしろいことばかりが目に浮かんでくるのです。それを一つ一つおまえさんに話してあげたいと思います。わたしは、なんだか、この二、三日、体からだのぐあいがよくないから、いつか気分のいいときにいたしましよう。なに、体からだが悪いって、寒さむさがこたえたのですよ。南みなみの方ほうの私わたしの生うまれた島しまは、いまごろは暑あつい日ひがつづくのですから、無理むりはありません。しかし、ここにいますと、のんきですよ。わたしの

大きい^{だい}風も当たらないし、人間^{にんげん}が万事^{ばんじ}いいようにしてくれ
 ますからね。しかし、なにしろ高価^{こうか}なことをいいますから、ちよ
 っとお客^{きやく}がわたしには手^てが出せ^だないのです。それで、去年^{きよねん}は、
 わたしは、ここに残り^{のこ}ました。今年^{ことし}もどうか。なかなか素人^{しろうと}
 の手^てに渡^{わた}つて、つらいめをさせられるよりか、どれほどこのほ
 うがいいかしれません。」と、らんは答^{こた}えました。

「それは、そうだ。俺^{おれ}なども、去年^{きよねん}傷^{きず}をしなけりや、とつくに
 ここにはいないのだ。今年^{ことし}は傷^{きず}もなおつたし、どこかへゆかなけ
 りやならないかもしれない。そうすりや、また、みんなと、こう
 して顔^{かお}を合^あわすこともないのだ。」といったものがあります。雪^ゆ
 割^{きわり}草^{そう}は、その声^{こえ}のする方^{ほう}を振^ふり向^むきますと、それは、サボテン

でありました。

「あなたがたは、みんな熱い国の生まれでしょう。だからそうお
おも
思いなされるんですけれど、わたしなどは、元来が野育ちな
かぜ
ですから、やはり風に吹かれたり、おりおりは、雨にもさらされ
あめ
たほうが、しみりといたしますわ。そして、わたしは、ちよう
ちい
や小さなはちが大好きですの。」と、かわいらしい声を出してい
こえ
ったものがあります。雪割草は、だれかと思つて、その方を見
ほう
ると、しゆる竹の蔭から、うす紅いほおをして、桜草が笑い
さくらそう
ながらいつているのでありました。

雪割草は、一目見たときから、この桜草が好きになりました。

「あーあ。」と、このとき、だれやらが、怠屈まぎれにあくびをしていました。

雪割草は、桜草のいったことに、同感しました。ガラ
ス戸をとおして、外に風が、黒ずんだ常磐木を動かしているのを
見ては、早くこの息づまるような温室の中から、広々とした
外に出たいものだと思っていました。

「外へ出たいなどと、ほんとうにいやなこった。俺は、今年も傷
痕が痛んで、ろくな花が咲けそうでない。もう一年このままに、
この室の中で眠ることになるだろう。外に出ても、これよりかも
つときれないな、気持ちのいい室へゆかれるならいいが、それでな
けりや、このまま眠っていたほうが、どれほどいいかしれやしな

い。」と、そのとき、サボテンはいいました。

それから、わずかな間に、みんなの上に思いがけない変わったことが起こりました。

あのようにおうへいについていたらんは、ある日貴婦人が店のものにつれられて、この温室に入ってきたときに、

「この花をきってください。」といったので、店のものは、はさみで、らんの花を根もとからきってしまった。

らんは、また、来年でなければ、花が咲かないのです。

その翌日、洋服を着た男の人が、やはり店のものといつしよに、この温室の中に入ってきました。

「かわいらしい、雪割草の花だな。これを届けてもらおうか。」

といいました。そして、雪割草は、その日の午後、この温室の中から、外に出されたのです。

外は、風が寒かった。しかし、雪割草の花は、これくらいのかぜに我慢ができません。風は、風が寒かった。しかし、雪割草の花は、これくらいの色は、ほんとうにさえて、青く、青く、美しく、美しかったものであります。外に出されたことを喜んでいました。

雪割草の花は、ある大きな家の窓の際に持ってゆかれました。「この花は、ここに出しておいてだいじょうぶだろうか？」と、洋服を着た主人はいいました。

「ええ、寒さには強いから、だいじょうぶです。」と、植木屋は

こた
答えました。

「ああ、そして、明日、桜草を二鉢ばかりとどけてもらおうか。」と、洋服を着た主人がいました。

「かしこまりました。」と、植木屋は答えて帰ってゆきました。

雪割草は、あの温室から出たことを、すこしも悲しいとは、

おも
思いませんでしたが、ただ、あの、なつかしい桜草に別

れたことが、名残惜しくて、ここにつれてこられる道すがら、

桜草の姿を目に思い浮かべては、涙ぐんでいたのですが、

あした
明日は、ふたたびいっしょになれると聞いて、うれしくてなりま

せんでした。

ちようど、日が暮れかかるすこし前でした。一ぴきのみつばち

がどこからか飛んできて、花の上に止まりました。そのみつばちはなんとなく、痛々しそうに見えました。

「ほんとうに、こんなかわいらしい花が、こんなところに咲いているとは知らなかった。」と、みつばちは、びつくりしたようにいいました。

「私は、今日ここへきたばかりです。」と、雪割草は答えました。

「長い、寒い冬の間、私は、花を探して歩いていました。けれど、まだ、あなたのように、美しい、小さな花を見ませんでした。私は、寒さのために体が弱っています。私のうすい羽は疲れていません。私は、元気がありません。しかしこうして、太陽が暖かに

照らしていただきますので、どんなにいまは気持ちがいいかしれません。どうかお願いですから、あなたの胸にあるみつをすわしてください。「といつて、みつばちは、小さな花の上に止まりました。しばらくすると、みつばちは、じつに悲しそうな声で叫びました。

「ああ、あなたの胸はあんまり小さい。そして、私のもらうだけのみつはありません。」といつて、悲しみました。

雪割草の花も、この言葉をきくと、なんとなくさびしさやら、哀れさに身ぶるいをしました。

「そんなに、お悲しみなさいますな。明日になれば、やさしい、美しい桜草がくるはずになっています。そうしたら、桜

草うに頼たのんで、みちをおもらいなさいまし。」と、雪割草ゆきわりそうの花はなはなぐさめました。

いじらしいみつばちは、雪割草ゆきわりそうのそばを離はなれかねて、じつとからだして体を太陽たいようの光ひかりにぬくめて葉はの上うへに止とまっています。そのうちに、日ひは西にしの空そらに傾かたむきました。常磐木ときわぎの葉蔭はかげから、赤あかい空そらの色いろが見みられました。すると、みつばちは、彼かれに別わかれを告つげて、いずこへとなく飛とんでいってしまいました。

その晩ばんは、雪割草ゆきわりそうは、雲切くもぎれのした空そらに輝かがやく、星ほしの光ひかりをなつかしげにながめることができました。そして、明日あした、桜さくら草そうがくるのを楽たのしみにいたしていました。

その明あくる日ひも、いいお天てん気きでありました。日ひにまし、春はるが近ちか

づいてきました。庭にわの木々きぎも元気げんきづいて、空そらを飛とんでゆく雲くもの影かげも希望きぼうに光ひかっていました。はたして、なつかしい桜さくら草そうはやつてきました。二つの鉢はちが並ならんだとき、

「あなたは、ここへきておいでなされたのですか？」と、桜さくら草そうは、ほおを紅あかくしていました。

「わたしわたしは、昨日きのうから、あなたを待まっていました。」と、雪割草ゆきわりそうは、桜さくら草そうをながめました。そして、昨日きのうは、かわいらしいみつばちのきたことを話はなしました。また、今日きょうもくるであろうと思おもったそのみつばちは、とうとうその日ひはきませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「福岡日日新聞」

1923（大正12）年1月1日

※表題は底本では、「みつばちのきた日《ひ》」となっています。

※初出時の表題は「蜜蜂の来た日」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みつばちのきた日

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>